

情報技術の匠

PROFESSIONAL

第49回

セキュリティの匠

だから、笑顔で。

大西のセキュリティの話は、面白い。そんな評判が広がっている。

「振り込め詐欺って、実は人間が自然に持っている認証化技術を突破するテクニックなんです。最初の『オレ』、でおばあさんにIDを認識させる。次いで学校名、誕生日などの情報を話すことでパスワード突破。だから個人情報の漏えいが、振り込め詐欺に使われているんです」

新書にしたら「話題の新刊」の棚にでも並びそうな内容。「すべらない話・セキュリティ編」とでもいべき興味深い話の数々は、「話芸」といってもいいかもしれない。

大西は、セキュリティに関する日本 IBM のアーキテクトであると同時に、世の中にセキュリティの本質を説くエバンジェリストでもある。セキュリティというと、高度な暗号化などの技術面が目目されるが、実際は技術だけで解決する課題ではない。だから大西は、まず人の心や盲点にフォーカスする。

「例えば、入退館管理システムなどへの莫大な投資。これを簡単に破ってしまう手段があります。何だか分かりますか？ それは社長の『顔パス』。『警備員さん、俺だよ、電子キー忘れてしまったので、ちょっとここ開けて』。『はい、分かりました』。この何気ないやりとりでゼーンぶ水の泡(微笑)」

セキュリティを高めるために必要なことは、意識を高めることである。だから大西は、あえて面白いエピソードも話す。トップからの意識付けが大切であること。セキュリティはシステム部門だけの問題ではなく、ガバナンスやコンプライアンスの問題であることを理解していただくために。

「確かにセキュリティというのは、ROI（投資利益率）には出にくい。投資してももうかるものではありません。しかし、個人情報漏えいを例にとると、訴訟で負けるケースがほとんど。裁判にならなくても一人当たりの補償金1万円、それが5,000人で合計5,000万円の損失。これに弁護士費用や、お詫び状の郵送費、それにかかわる人件費…。その上問題なのは、ブランドイメージ。一度崩れたら、取り戻すことは容易ではありません」

必然的に、大西が話す相手はトップ、監査部門、企画やお客様サービス、営業といった部門の担当者など社内全般にわたる。全社で理解してもらわなければ、「社長の顔パス」のようなささいなことからすべての対策が意味を失ってしまうからだ。

「不況になると、日本はセキュリティやコンプライアンスにかかわる予算を削る。でも欧米では、不況になれば悪いことをする人が増える



大西 克美（おにし かつみ）

日本アイ・ビー・エム株式会社
ITS 事業部
ITS ソリューション
ICP エグゼクティブ IT アーキテクト

【プロフィール】

1986年入社。お客様担当SE、UNIX®、インターネット基盤を中心とした技術分野を経て、2000年代前半よりセキュリティ分野に従事。100社以上のお客様に対し、セキュリティ、プライバシー、コンプライアンス分野におけるコンサルティング、設計を担当。03年より国内、06年よりグローバルのセキュリティ・コミュニティ・リーダーを務めるなど社内における第一人者に。講演、社外執筆、外部団体活動など幅広く活動。情報処理学会正会員、政府統一基準セキュリティ・ワーキングメンバー。

ということで、むしろセキュリティの予算を増やす。今後は日本でも同様になってくるかと思えます」

こうした対策もトップの理解がなければなかなか進まない。プライバシー対策では、シリアスな脅威にさらされ続け、経験値の高いEUが進んでいるが、日本でも同様の水準の対策が求められるようになるだろう。アメリカで施行されたSOX法が日本でも導入されたように、海外での先行事例も伝えるべき重要な情報だ。

セキュリティに対する意識、課題は変化し続けている。また、守るべき範囲も広がっている。「情報の漏えいを防ぐ」という内部の統制から、「情報への攻撃から守る」戦いまで…。厳しい現実をあえてお知らせする仕事。だからこそ大西は笑顔で語る。ネクタイをきつく締めて膝を付き合わせて、ではなく、少し襟元を開いて肩の力を抜くことから始める。

「セキュリティの話は、やはりお客様にとっては重い話。プロジェクトに水を差してしまうこともあるでしょう。だから少しでも明るく(笑)。彼の話は楽しいからまた呼ぼう。そう思っていただければ」



その評判の結果か、全国を飛び回る毎日。札幌から沖縄へ。出張もいつしか日常に。

「時差よりも温度差のほうが厳しいんだな、と実感しました(笑)」

拠点である大阪にいられるのは週に1日か2日。それでも全国各地のお客様への「行脚」は、体にはきつくと、ワクワクする日々。唯一つらいことがあるとすれば、家

族との時間、ということになるだろうか。大西には2児がいる。

「休日、大阪に戻れば子どもたちと遊んでいます。でも…そこでもまたいろいろ考えますね」

下の中1の子はすでにネット・ゲームが当たり前になり、デジタル・オーディオ・プレイヤーにインターネットからコンテンツをダウンロードするのも日常だという。彼らを見ているとネットや著作権に対する考え方や、環境が日々変わっていることを身近に感じるのだ。

「動画サイトにどこかで使われている作品をアップロード、ダウンロードすることが、小さな子どもでも簡単にできる時代。著作権に関することを理解する前に、当たり前のように彼らは使いこなしています。オンライン・ゲームもそう。貴重なアイテムをオークションで高額でやり取りすることもある。わたしたちが子どものころとまったく違う時代なんです」

大西は遊びの中で子どもに、ネットの脆弱性や著作権侵害とはどういうものかを自然に身に付けてもらおうとしている。だが、どれだけの親が子どもに対して教えられるだろうか。自分が被害者になるだけでなく、時には自分が意識していないうちに加害者になっていることもある。社員が良かれと思って自宅で行った結果、機密情報が外部に流出する、そんなケースも少なくない。

「ある若い人に、他人のホームページの著作物を勝手に使ってはいけないよね、と言ったところ『それが悪いことだとは学校で教わっていない』と切り返されました。学校では立派なパソコンが並び、使い

方は勉強しますが…。良い悪いではなく、今はそういう状況であることを理解すべき」

漏れるのではなく盗まれている。情報を広く伝えたいという善意のネット・サービスが、誹謗中傷や炎上の舞台となる。悪意は連鎖する。すでに顧客情報の流出は、アクシデントではなく、組織的犯罪者からすればビジネス・チャンスである。確かに重い話だ。だからこそ、大西は笑顔で語る。ちゃんと対応すれば幸せな世界がそこにあるのだから。



世界はこう、時代はこう、そこからセキュリティをどう考えるか。大西の話からお客様は、鋭い嗅覚と肌感覚でヒントを得ていく。そのキャッチボールが、日本全体に広がっていけば、もっと日本のネット環境は良くなる。それが大西の願いでもある。

「先の話ですが、会社を引退したとしても、セキュリティの重要性を説く仕事は続けていきたいですね。講演でも、監査側でもいいかな(笑)」

IBMとしてキャッチできるグローバルの最新事例、公共、金融、流通、製造などあらゆる現場のセキュリティの現状を理解している経験、そして子どもたちとの何げない会話。これらすべてが大西の「話芸」の元。クラウド・コンピューティングが実現する、すべての人がコンピューター・ネットワークと幸せな関係を支えるために…。

今日、この時間も、大西の「行脚」とも「公演」ともいえる旅は、続いている。